政策提案 **「図書館における蔵書のテキストデータ化の推進について」**

2023/07/31　　Ver1.1くわざわ、かんの、そしてT先輩。
日本で一番蔵書が多い大阪市立図書館は500万冊。対して障害者用電子図書館「サピエ」は80万冊ほど、しかも蔵書の差は埋まる気配はない。

これが娯楽であれば甘受もするが、書籍の準備に時間がかかりすぎたり、そもそもデータがないなどし実際には学業・研究・就労には多大な影響、率直にいえば役に立たない場面も多い。結果的にはごく一部の条件が整った人以外は学習のみならず職業選択の自由をも侵害されることになりがちである。

そこで
蔵書受け入れ時点でのテキストデータ(今ご覧になっているようなパソコンやスマートフォンでの読み書きが可能な印刷文字ではない電子データ)情報格差を周回遅れから埋めていくことを提案したい。

*「サピエ図書館を対象とした所蔵調査」というレポートを引用します。*http://www.mslis.jp/am2017yoko/02_agata_rev.pdf
3.1.2 図書と雑誌の割合

サピエ図書館の資料における
表1 図書と雑誌の割合
視覚障害者向けに作成される資料は大半が図書 であり、雑誌は非常に少ない
3.1.3 資料数上位の著者
多くの資料が作成された著者を表 2 に示す。
3.1.4 資料数上位の出版社
作成された資料数が多い出版社を順位ごとに表 3 に示す。出版物全体では地図制作会社として有名なゼンリンは多くのタイトルを刊行しているが、地図という特 性上、視覚障害者向け資料が作られることは少ない。 一方で新潮社、文藝春秋などの文芸書を多く刊行し ている出版社は出版物全体では上位にはないがここでは上位となっている。

以下はユーザーでもあるT先輩からのコメントですが…
「サピエって、特定の本が多いとか、まだまだそういうことってあるんだよなぁ。昔から比べたら少なくなっているだろうけど、やたら宗教関係の本とかは多かったらしい。あと山量(原文ママ)→三療も。あとやっぱり、Kindleで本が読めないとかスクリーンリーダーで、だから読みたいときに読める本て、残念ながらあんまりないんだよね。そういう状況を知ってもらうのはいいと思うの。」

そう、皆さんがお使いのKindleなどでも本文の内容を読み上げができるものもあるがそれも全てではなく、そういう書籍に遭遇する度に落胆することになってきました。また、ページ数が多いと読書に関する負担が大きくなるので、パソコンなどでも使える仕組みがあることが望ましいのです。紙の本に文庫本や愛蔵版などの選択肢があるのと同じように。
「あるだけマシだろ」といったひとには、ちょうど芥川賞受賞作のハンチバックを読んでから同じことが言えるかきいてみたいところだ。言いたいことの多くは書いてあることの先にある。

続いて後輩のコメントを丸ごと引用する。なにも足さない、なにも引かない。
どこかで聞いたフレーズだがこれ以上にふさわしいキーワードがない。お許しを。

「想像してみてください。
日本語を母語として生まれて2023年を生きているある人物は、視力を失った時期に点字の読み書きのための習得環境を得ることが叶わず、自由に扱える文字を失ってしまったために、もっとも好きであった趣味の読書ができない約8年間を過ごした経験者です。
実は、これは私自身の経験をお話ししています。

私は全盲にやや近づきつつあり、手動弁と呼ばれる状態にある中途の視覚障害者で車椅子生活を送っております。元々は目には何の障害も抱えていない子供でしたので、前触れもなく重度視覚障害を抱えるようになった自分自身の経験によって、世界的に大多数の方々が人生を重ねておられる視覚障害ではない文化を知っており、数10年経った現在も私そのものがそれを記憶しております。

識字率が大変高いとされ、専業主婦も高齢者もおそらくは子供たちも知るところであろう、読書により視野を広げる効果を視力での情報収集80%以上がうしなわれた人生を生きる人々の損害について、私は心が痛むと同時に改善される日がきますようにと願って病みません。

昨今のコロナ禍で健常者の皆様から助けていただけるはずの対面サービスや印刷物を実際に手に取ることが大変難しくなっていると考えます。感染症対策を注意しなければならなくなる前の時代はどうであったのかと申しますと、学生として提出するためのレポートに必要な資料、インターネット上にはない資料が私自身の芸術面での取り組みや執筆業に欠かすことのできない本だとしても、印刷物を点字に訳すための所用日数をどれほどゆとりを持って点訳ボランティアへ説明しても私が資料を読む緊急性がまったく伝わりませんでした。
その結果、点字本を受け取ることになっていた予定日ではなくそこから1年2年後に手元に届くという苦しい経験を幾度となくしています。
一人の人として、社会人としての必要を賄うために点字での読書をするとはいえ、さまざまな物の健常者の方々が提出先となっていることなどを踏まえましても、蔵書のテキストデータ化が活発になりますと読書と同時進行で各文章に用いられている漢字の確認作業の面でも方の荷が少し軽くなった気がいたします。
更には、地球環境とその素晴らしい資源、時間経過と歴史の移り変わりにもっとも好ましいのは多種多様な障害状況の方が探して心置きなく選ぶことが可能なテキストデータ化なのではないでしょうか。
さほど遠くないどこかの未来でのVR空間の読書もテキストデータ化された図書館の蔵書なのではないでしょうか。
蔵書のテキストデータ化の取り組みの進歩は、Japaneseカルチャーとして世界中が認知しているアニメーション作品やサブカルチャーを応援してくださっているさまざまな言語の障害者の方々の日本語への興味にも繋がるのではないでしょうか。

私たち視覚障害当事者によるプレゼンテーション「図書館における蔵書のテキストデータ化の推進について」のために、お時間を取り分けてくださった皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。
第2の心臓である心と知的好奇心が視覚障害者の生涯においても、図書館の膨大な蔵書によってどうか1日も早く豊かになりますように。」(菅野/かんの)

以上となります。ご清聴ありがとうございました。